イザベラ・バード秋田の旅（７）土崎湊編

2018年7月29日 掲載

１８７８（明治１１）年７月２５日、土崎湊（現秋田市土崎港）に向かう羽州街道は大勢の人でごった返していた。その中にいたイザベラ・バードは、前方にある「謎の物体」に気付く。「塔のように突き出たもの」「巨大な５本の指」「枝の突き出た数本の樹木」―。近づくたびに印象が変わるその物体の正体は、２００人の男たちが引っ張る高さ約１５メートルの曳山（ひきやま）だった。

◇――◇

バードが遭遇したのは土崎神明社祭の曳山行事。巨大な指に見えたのは、曳山の台の上に作った夫婦（めおと）岩だ。木材の骨組みを黒い布で覆い、先端は男岩と女岩に分かれている。岩の間には滝に見立てた白い布を垂らし、岩のあちこちに松の枝を飾っている。曳山行事に詳しい同市の民俗文化研究者・菊地利雄さんは「曳山は神が降臨する場所。それにふさわしく、険しい深山を表している」と話す。

現在の曳山の高さは約５メートルだが、電線が架設される１９０１（明治３４）年ごろまでは１０メートル超、２０メートル超の曳山が作られた。記録にある最大の曳山は高さ約２６メートル。「町内が競い合い、どんどん高くなっていった」（菊地さん）という。

藩政時代、土崎湊は北前船と雄物川舟運の結節点として繁栄を極めた。各町内の有力者とともに、曳山行事にかかる費用や人員を引き受けたのは廻船問屋などの商人たちだったという。藩から専売特許権などを付与されて財を成し、曳子には荷揚げや荷降ろしをする仲任（なかせ）を動員した。藩の御用商人・津村淙庵（そうあん）は１７８９（寛政元）年に曳山行事を見て、久保田城下よりにぎわっていると評している。

だが明治に入ると交易に関する保護政策は廃止される。バードが訪れたのは、自由競争の中で商人の新旧交代が進むなど激動の時代だった。にもかかわらず、「日本奥地紀行」には人の背丈を超える人形を飾った曳山のほか、にぎやかな囃子（はやし）や華麗な舞が披露される場面が登場する。そしてこうした風流（ふりゅう）を楽しむ大勢の人々の姿も。「日本で見たことのなかったような、活気にあふれる陽気な光景を見ることができた」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」より）

◇――◇

「近世秋田の町人社会」（金森正也著）によると、幕末期には有力者や商人のみならず、借地人や長屋住まいの者も祭りの費用を負担していた。時代が変わっても壮麗な曳山行事が行われていたのは、担い手の拡大に成功したからだ。

「地域の人々にとって見るだけだった祭りが、参加する祭りになった。地域全体で関わるようになったからこそ現代まで受け継がれたのだろう」と土崎神明社の伊藤茂樹宮司。バード来訪から１４０年、今年の曳山行事も盛大に行われた。

© 2019 Akita Sakigake Shimpo